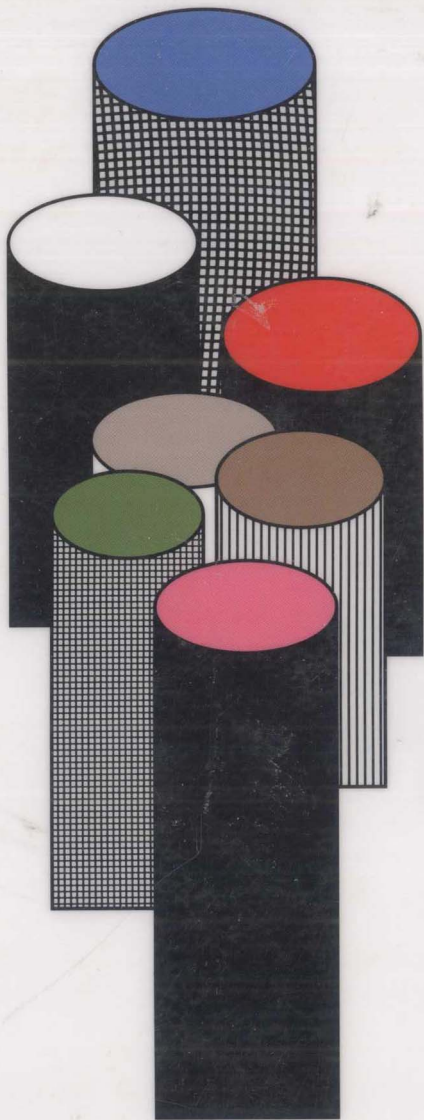


みだ
乱れ籠、七つ
かご

プロデューサーの発想法

藤岡和賀夫

Producer's Eye

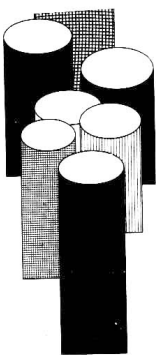


みた
乱れ籠、七つ
かこ

プロデューサーの発想法

Producer's Eye

藤岡和賀夫



著者紹介

藤岡 和賀夫（ふじおか・わかお）

兵庫県に生まれる。1950年東京大学法学部卒業後、電通入社。80～87年PR局長（役員待遇）。87年11月よりフリープロデューサー。日本の広告史を画したキャンペーン〈ディスカバー・ジャパン〉〈モーレッツからビューティフルへ〉など、数多くのプロデュース活動により70～80年代を通して電通のエースとして活躍。また、「脱広告論」を中心にいち早く広告の文化価値を主張。活発な言論著作活動を行う一方、今日のTVスペシャルやシンポジウム・ブームのバイオニアとしても注目される。84年のベストセラー『さよなら、大衆。』では、成熟消費社会における小衆化現象を摘出し、「大衆・小衆論争」を巻き起こした。現在は、毎年、日本の現代文化を海外の都市で紹介するイベント「Close-up of Japan」をプロデュースするほか、プロデューサー「直伝塾」を主宰している。

《主要著書》

『さよなら、大衆。』（1984、PHP研究所）、『オフィスプレーヤーへの道』（1989、文藝春秋）、『プロデューサー藤岡和賀夫全5巻』（1991、電通、第1巻「ディスカバー・ジャパン」第2巻「モーレッツからビューティフルへ」第3巻「学びの出発」第4巻「南太平洋キャンペーン」第5巻「クロースアップ・オブ・ジャパン」）、『ウォット・タイム・イズ・イット・ナウ』（1992、PHP研究所）、『日本は黄昏』（1995、PHP研究所）

みだ かご 乱れ籠、七つ

——プロデューサーの発想法——

1996年2月22日 初版発行

著者／藤岡和賀夫

© 1996 Wakao FUJIOKA

装丁／幅 雅臣

印刷／堀内印刷所

製本／石毛製本所

発行所／ダイヤモンド社

〒100-60 東京都千代田区霞が関1-4-2

電話／03・3504・6403（編集） 03・3504・6517（販売） 振替口座／00190-6-25976

ISBN 4-478-70097-4

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

はじめに

八年前に会社を辞めたとき、これからはどんな肩書きでいくんですかと、何人もの人に聞かれてまごついたことがあった。私にしたら、一切の肩書きや所属と無縁になりたかったのが辞めた大きな理由だったので、その件では周到な答えを用意していなかったのだ。が、それでは相手が困ることもあるぞといわれた。たとえば新聞、雑誌などのマスコミ。それで気がついたが、彼らは人名を登場させる時には必ずアタマに職業や肩書きをつける。作家の誰々氏、音楽家の誰々氏というように。何もないときでも、会社員の、主婦の、と書く。はては無職の誰々氏である。

さすがに私も、無職の藤岡和賀夫氏と書かれるのは気が進まなかったもので、それなら自ら「プロデューサー」を名乗ろうということにしたのだ。もちろん名刺にそんなものは刷りたくないが、署名原稿などのクレジットは以後「プロデューサー」、あるいは「フリープロデューサー」となった。

しかし、こういうと、私の「プロデューサー」がいかにもいい加減な頼りないものに見

えてくるかもしれない。が、本当はそうではない。私が考えるプロデューサーというのはとても範囲が広く茫漠^{ぼうばく}としてゐるからだ。映画、演劇など、分野を特定できるなら映画プロデューサー、演劇プロデューサーと称したらいいだろう。現に、イベントプロデューサーとかメディアプロデューサーを名乗る人だっているぐらいだ。しかし、あれもこれもという場合はどう名乗ったらいいかということである。

いや、そうなれば、もう分野が広いのどのという話ではないだろう。ある種の気質、プロデューサー気質といったものを持っているかどうかでとらえたほうがいいともいえるのだ。

考えてみれば作家という呼称だってそうだ。一篇も作品を書いたことがなければ名乗る資格はないだろうが、ミステリーとか歴史小説とかの得意分野には関係なく、なべて「作家」と称して許されるのは、他の人種にはない作家気質ともいうべきものを身につけているからに相違ないのだ。

この道の大先輩の小谷正一さんはとても話の巧みな方だったが、生前、「プロデューサーとはどんな人か」という問いに対して、しばしば次のような比喻で話をされていた。

誰でも知っている日本三景のうち、天の橋立と松島は天然自然が作ったものだ。しかし

安芸の宮島はどうか。あの、海中に社を建てるという破天荒なアイディアを発想し実現に持って行った人こそがプロデューサーと呼ばれていいのだ。

この、誰にでもピンとくる話だが、のちになって私は、小谷さんは話を一つ省略されていると感じた。安芸の宮島を見て、あるいはこの話を聞いて、なるほどなるほどと感心しているうちはまだプロデューサーを本当に分かったとはいえないのではないのか。作家にしても評論家にしても、この話を聞いてなるほどと感心することはあるかもしれない。感心ついでに関心を持って「宮島物語」でも書こうかと考えることだってあるかもしれない。

ところが、プロデューサーたるものは絶対にそういうことをしない。人の作ったものを素材に話を作ったり評論したりすることを潔しとしないのだ。ではどう反応するか。ただ「チクショー」である。「チクショー、先にやられた!」と口惜しがったり、「オレだったらかうするぞ!」と敵愾^{てきがい}心を燃やしたり、うわべは冷静を粧^まつても心の中でそんな反応をするのがプロデューサーである。気質というのはそういうことだ。

と、私は私で、日頃考えているプロデューサー論を少しばかり披露したら、相手は、気質といえは藤岡さんの文章にはそれが表れているというのだ。ダイヤモンド社書籍編集部（同姓の）藤岡比左志氏である。だったら、あちこちにいろいろ書いた私の最近の文章

を一冊の本にまとめてはどうか。作家や音楽家のエッセイとはまた違う別の味の本になるはずだ。それに最近の若い人にはプロデューサー志向が多いから、何かの刺激になるのではないかというお誘いである。

もとより私に異存のあらうはずもなく、それではと、ここ半年間、こつこつと手を入れてまとめたのがこの本である。その初出誌紙を本の構成順に並べると次の通り。

一、『ビジネスボイス』(PHP研究所)／二、『就職ジャーナル』(リクルート)／三、『マネージメント』(東海総研)／四、『カルティベーター』(福武書店、現ベネッセコーポレーション)『PHP』(PHP研究所)『You&Y's』(安田生命)『ほんとうの時代』(PHP研究所)『コーポレートコミュニケーション・ジャーナル』(ドンナカンパニー)／五、『PAJジャーナル』(印刷工業会)／六、『日経流通新聞』／七、『プレジデントセミナーテキスト』(プレジデント社)

私にとってもこの本作りは自分を見直す楽しい仕事になりました。藤岡さん、多謝。

一九九六年二月

著者

乱れ籠、七つ

目次

はじめに

一の籠

勝鬃橋から「オフィスプレイヤー」になるヒント 1

乱れ籠..... 3

海水浴..... 8

眠られぬ夜..... 13

バカンス..... 19

疑問符..... 24

礼状..... 29

就職する息子への十通の手紙

35

第一便	さよなら、情報通	37
第二便	さよなら、名刺依存症候群	41
第三便	さよなら、協調性	45
第四便	さよなら、学歴づくりのお勉強	49
第五便	さよなら、身売り意識	53
第六便	さよなら、仕事を身につけない新入社員	57
第七便	さよなら、肩書きだけの「出世」	61
第八便	さよなら、甘い考えの就職	65
第九便	さよなら、無教養	69
第十便	さよなら、会社べったり	73

三の籠

いま、「自分流に生きる」とは 77

人間の本籍地はどこか.....	79
ある夏の体験.....	79
欧米人に対する「畏れ」の正体.....	81
「バカンス」が意味するもの.....	83
「会社人間」からの脱出.....	86
終身雇用制度の裏側.....	86
崩れた企業成長神話.....	88
なぜサラリーマンになるのか.....	91
「自分表現」が生涯の「自分流」だ.....	93
「ワーク」からの脱出.....	93
「プレイ」とは.....	95
生涯を見通して誇りに賭ける.....	97

四の籠

私の景色

99

「忙しい」が消える日.....	101
サラリーマンの鑑.....	107
日本の父の復権.....	111
プランニングを楽しむ.....	115
広報マンの条件.....	121

五の籠

私の仕事——「クロスアップオブジャパン」をめぐる

131

コンセプト上手の企画下手……………

133

面白くなければ企画じゃない……………

139

日本の本当の顔を知らせたい……………

142

伝統偏重の中でコンテンツポラリィ重視へ……………

147

冠をつけない効果は絶大だった……………

150

要注意！仕事のやり方にもお国柄……………

155

何が自分の動機か……………

157

六の籠

世の中の景色

161

変わるものと変わらぬもの……………

163

森に囲まれた憧れの町……………

166

過疎の町の世界的な試み……………

169

七の籠

プロデューサーの素顔

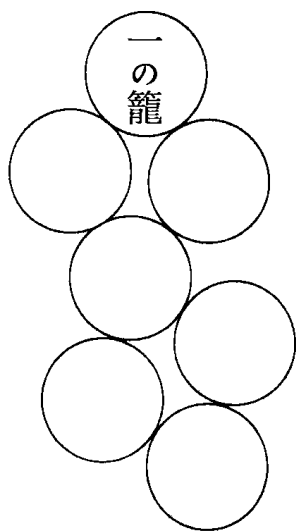
197

南極のネオン.....	199
第三の靴.....	202
想像力の翼.....	206
自分の土俵.....	210

ワンマン企画.....	214
満足という報酬.....	218
ヒットの経歴.....	222

遊歩道のないリゾート.....	172
違法駐車摘発シルバー隊.....	175
首都高速道路撤去計画.....	178
オーブニング・パーティの夜に.....	181
企業メセナに「ひまわり」作戦.....	184
不思議の国の「国際貢献」.....	187
鉄のトライアングルを崩すもの.....	190
「日本ナショナルトラスト」を知っていますか?.....	193

勝鬃橋から——「オフィスプレイヤー」になるヒント



乱れ籠

お酒はぬるめの爛かんがいい。女は無口なひとがいい。そうか、でも、机は広けりや広いほうがいい、とは誰も教えてくれなかったなあ、サラリーマン時代。

その真理にやっと気がついたのは、フリーになって初めて自分のオフィスらしきものを構えるようになったときのこと。好きに作り、好きに使っていいといつて貰った事務所スペースを眺めながら、さて、どんなオフィスに仕上げたものかと思案を始めた。が、オフィス、オフィスと呪文のように唱えても一向にアイディアが浮かばないし、陳腐なイメージしか湧かないから、えーいと、倉俣史朗さんに一任した。そうしたら、何と長さ六メートル六十センチの机ができてしまったのだ。